

【3-32】

湾・灘の区分	周防灘
取組の名称	中津市大新田松林再生プロジェクト
事業期間及び事業費	事業期間： 2015 年度(平成 27 年度)～2017 年度(平成 29 年度) 事業費： 3,531,366 円
事業体制	当会、市民ボランティア、企業、県立短大、県、市、樹木医など
事業の背景・目的	かつては、白砂青松の景観を呈していた大新田海岸の松林は 40 年以上事実上放置され、外来照葉樹などの藪と化し、人が近づけないことから不法投棄などの温床となっていた。 干潟の保全団体である当会は、干潟のエントランスとも言える松林の現状を看過することが出来なかったことから、これを再生することとした。そして、30 年程前に消滅した当地域の恒例行事であった浜遠足の復活を目指した。浜遠足の復活にこだわったのは、多くの人々の記憶の中にはっきりと残されていること、美しい海岸風景の記憶が地域アイデンティティとしての力を有していることなどからであった。
事業場所の詳細	中津市大新田海岸の一部 6,500 m <sup>2</sup> 。
事業内容	初期の作業として藪と化した低木を伐採し、松が好む環境の復元を目指した。同時に、後背地や既存の生態系への影響を考慮して南側の藪においてはこれを残す事とした。照葉樹の伐採と搬出が終了した後、年 4～6 回程度定期的に下草の刈り込みを行った。おおむね 3 年程度の時間をかければ松林の短期的な復元は可能である事が分かった。 松林の復元過程で、多数の市民ボランティア、樹木医などの専門家、企業、行政関係者が参加した。 一定程度の松林復元が出来たことから、浜遠足を再現したイベントを実施した。
モニタリング方法 (効果・影響の確認方法)	①調査項目 ・植生 ・参加者 ②調査時期・頻度 春・夏・秋 年3回 ③調査地点数・調査場所 1ヶ所(中津市大新田海岸) ④モニタリング方法 ・植生： 松林林床などの定性調査(目視及び写真記録等) ・参加者： 整備参加者のカウント
取組による効果・影響及びその判断基準等	・海岸にやってくる人が増加した。もっとも敏感に反応したのは近年増加した外国人たちであった。スポーツを楽しむ人、楽器を奏でる人、ただ海を見ながらくつろぐ人、散歩を楽しむ人などであった。 ・以前よりも大型廃棄物の不法投棄の量が減った。
モニタリング結果の分析及び活用の方法	・分析方法： 経年変化を分析 ・活用方法： 松林の維持管理、松林再生の過程を記録することに同様の活動への指針づくりに活用
現状での課題	レジャー環境が現れたことから、火を焚いて楽しむ人やバーベキューを行う人々が出てきたため、注意喚起のための看板を設置せざるを得なくなった。特に、中国、韓国、ベトナム、ネパールなど様々な亜細亜圏の人々が集うことから、多言語による注意喚起の看板を設置した。
今後の予定等	・継続して松林整備作業を続ける。 ・植生のモニタリングについて、現在実施している目視及び写真記録などの定性的な調査から、植生の記録、菌根菌などを利用した指標生物を設定し、松林の環境がどのように変化しているのかを定量的に把握することも検討したい。

取組事例についての発表資料等	特定非営利活動法人 水辺に遊ぶ会、事業名「大新田海岸の原風景再生プロジェクト事業」『協働モデル事例集(地域を担うNPO 協働モデル創出事業)』大分県消費生活・男女行動参画プラザ(アイネス)、県民活動支援室、2019年、p23-29
情報提供元	特定非営利活動法人 水辺に遊ぶ会